慢性期における重症頭部外傷患者の機能改善—新しい評価スケールによる治療効果の検討—

○小瀬　勝[1]，内野　福生[1]，岡　信男[1]，河野　守正[1]
自動車事故対策機構　千葉療護センター　脳神経外科[1]

【目的】受傷から数年以上経過した慢性期において、重症頭部外傷患者の機能が改善するかについて検討した。【対象・方法】1997年10月から2005年5月までに入院した、交通事故により頭部外傷を受けた重度の後遺障害者60例を対象とした。受傷時の年齢、入院までの期間、退院した37名の在院期間、評価スコアについて検討した。慢性期における評価スケールの判定項目は、覚醒レベル、運動機能、言語理解、言語表出，視覚による認知、聴覚による認知、摂食機能、表情の変化、排泄、寝返り、移動の１１項目で、最低が0点で最高が100点である。【結果】男性47例、女性13例で、受傷時の年齢は平均22.7歳、入院までの期間は平均2.9年であった。23名が入院中であり、37名が退院し、その在院期間は平均3.3年であった。評価スケールで１０点以上の改善がみられたのは60例中30例（50%）で、入院後２年以内にスコアの改善がみられた。入院時スコアが20点未満の群では25例中7例（28%）であった。一方、20点から39点の群では16例中11例（69%）であった。40点から59点の群では8例中7例（88%）であった。60点以上の群では11例中5例（45%）であった。退院した37名の在院期間は平均3.3年であった。【まとめ】受傷から数年以上経過した重症頭部外傷患者において、慢性期における適切な治療により、60例中30例（50%）に何らかの機能の改善を認めた。スコアの改善の大部分は治療始後2年以内に見られた。